Osaka University Knowledge Archive

Title	動物に対する援助行動における心理的報酬および愛他性動機
Author(s)	岸本, 渉
Citation	対人社会心理学研究. 2001, 1, p. 159-170
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11424
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

対人社会心理学研究, 2001 年, 第 1 号, 159-170.
Japanese Journal of Interpersonal and Social Psychology, 2001, No. 1, 159-170.

動物に対する援助行動における心理的報酬および愛他性動機

岸本渉(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究はどのような心理的報酬および愛他性動機が動物に対する援助行動に影響するのか検討することを目的として行われた。援助を必要とする状況にある犬のうち、どのような犬を助けるかを選択する質問紙に204名(男性82名、女性122名)の被験者が回答した。犬の年齢、援助状況、物理的なコスト、回答者のペット飼育経験、回答者の共感性が動物に対する援助行動に影響を与える要因として操作され、援助選択に対するこれらの要因の効果が分析された。主な結果として、1) 援助の選択が犬の命だけでなく援助者の命をも危険にさらす状況では、そうでない状況に比べて、物理的なコストが援助選択にあまり大きな影響を与えておらず、回答者はどちらの犬も助けたいという葛藤を感じていた、2) また、現在ペットを飼っている人および強い共感性を持つ人ほどこの葛藤をより感じやすいという結果が得られた。以上の結果から、援助を必要とする動物を助ける際、その愛他性動機にペット飼育経験と共感性が重要な役割を果たすことが示唆された。

キーワード：援助行動、社会的交換、共感性、愛他性、動物、ペット

問題

心理学において従来扱われてきた援助行動において、暗に想定されている被援助者は人間である場合が多い。しかし現実の社会においてわれわれの援助行動は、動物やペットに対して向けられることも少なくない。われわれの援助行動における援助対象が動物及びペットである場合、その行動機序はどのようになっているのであろうか。

動物・ペットと人間の関わりそのものを促進する理論的な根拠については、様々な仮説が提出されている。まず人間とペットとの関わりの歴史を鑑みれば、文化的遺伝説（Levinson, 1972）にあるように、動物との触れ合いを求める内的欲求が文化的心理的に埋め込まれているということが考えられる。また、動物には人の行動を批判せず、人を無条件に愛し、受け入れる特性があるという指摘がある（Levinson, 1984; Mallon, 1994; Foles et al., 1994）。そのような中で、ペットを飼う役割を果たすことが自己効力感・自信を高めるとする社会的役割理論（Netting et al., 1987）、動物がそばにいると飼い主と周囲の人との社会関係が改善され、促進されていく点を指摘する社会的潤滑剤説（Levinson, 1969; Corson et al., 1977; McCulloch, 1981）などのように、ペット動物の社会機能的な側面に焦点を当てた仮説も多い。また、動物に触れることが血圧の低下を促すことから、緊張や抑制の緩和を示唆する皮膚接触感覚説（Katcher, 1981; Baun et al., 1984）もある。

社会心理学における代表的な理論である社会的交換理論（Social Exchange Theory）からすれば、こういった社会機能的な利益や生理的な変化に加え、友情や安心感、感情の支えといった心理的利益は大きく、これが一種の強化子として機能していると考えられる。ただし、状況によっては、特に多くのコストを伴う援助行動において、その結果、表面的物質的な損失がしばしば大きく見積もられる。本研究では、動物に対する援助行動が動物との関わりを重視する行為であり、そこから心理的報酬を得ているという前提に立ち、この心理的報酬と表面的物質的なコストとの交換過程を検討する。

ところで援助行動及び利他行動は、心理学の分野のみならず進化生物学や社会生物学といった分野でも、それが「行為者のコストによって他個体に利益を授ける行動」であり、その「コストは繁殖成功の減少として測定される」(Trivers, 1985)ものであることから、その形成過程が大きな命題として扱われ

てきた。援助が血縁関係にある個体間で行われる場合、その援助は血縁集団全体で共有された遺伝的形質の適応度である包括適応度（inclusive fitness）の観点から説明される。Burnstein et al.（1994）は援助選択における援助者と被援助者の血縁性、被援助者の年齢、性別、健康、裕福さ等の影響を分析し、特に援助の成功が援助者・被援助者の生命に影響する、生物学的に重要な生死状況において、人間でも援助行動の生起と血縁性の近さが強く関連していることを報告している。一方、人間の動物に対する援助行動を扱った研究は少ない。血縁関係にない、時には異種間で行われる利他行動の進化を説明するシナリオの1つとしては互恵的利他行動（reciprocal altruism）の理論が提出されている（Trivers, 1971）。この理論の骨子は、ある援助行動によって一定の損失が生じても、その損失と同じ恩恵が援助対象からフィードバックされる社会交渉が繰り返されるなら、その行動は進化・発達するというものである。そのため必要な条件として、特定の個体間の長期にわたる社会関係の存在や、相互に個体を識別し、過去の行動を記憶・認知する能力の有無といった相互個体間の密接な関係性が挙げられている。なお心理学においても、他者に対する感情が援助行動やその意図に影響を及ぼすことが見出されており（Baron, 1971; Regan, 1971; 斉藤, 1985）、これは援助者・被援助者の性別、緊急か非緊急かの状況要因より大きな効果を持つことが示唆されている（竹村, 1988）。意味ある対人感情の多くが、密接な対人相互作用の中で生まれることを考えると、ここでも個体間の密接な関係が援助行動において重要であることが示されていると思われる。本研究では、回答者のペット飼育経験を助ける動物との関係性の指標とし、これが援助選択に与える影響について検討する。

なお、動物に対する援助行動は人間の利他行動における愛他性動機を論じる上で、利点の多いトピックであると思われる。ただし本稿における愛他性とは、その最も強い弁護者である Batson（1991）の主張するように、あらゆる内的心理的報酬をも利己的な動機づけとして排除するものではなく、従来考えられていたように（Staub, 1978; Cialdini, 1981. etc）、外的な動機づけの結果とみなされない援助はどんなものでも愛他性とする定義に基づく。動物は直接、援助者に表面的物質的な返報をする可能性が少ないと考えられるので、これに対する援助行動における愛他性動機を想定しやすい。本研究では、この愛他性動機に影響を与えると思われる要因をさらに2つ取り上げる。1つは感情と援助行動の関係を検討する研究文脈の中で、主に取り上げられてきた内的変数である共感性（empathy）である。共感性は他者の利益や苦痛の低減を目的とした愛他性動機をもたらすという点で、他の情動要因とは区別される。共感的配慮の高まりが援助行動を促す研究は数多いが、特に Batson はより限定した立場で愛他性動機を検証する研究を行っている（Batson, 1991）。Batson によれば、物質的報酬や社会的賞賛だけでなく、困窮する他者の生み出す精神的苦痛からの脱出さえも利己的な援助動機であり、これらを除いた、純粋に援助を求める相手だけを意図した援助行動があるという。「さらにこうした本当の愛他性の源は、応答的な情動的反応としての共感的配慮にあるといえる」（Davis, 1994）。本研究では共感性の情動的側面に焦点を当てた情動的共感性尺度（EES: Emotional Empathy Scale; 高木, 1976）を用い、この内的変数が動物に対する援助行動の選択に与える影響について検討する。

もう1つは、われわれに接近・保護・世話といった行動を無条件に触発する赤ん坊性（babyishness）についてである。これは Lorenz によって幼児図式として指摘され（Lorenz, 1965）、幼児期のある形態的特徴がわれわれに養護的愛他的感情を引き出させるというものであるが、Lorenz によればこの触発刺激は人間が動物の幼体に接する場合でも有効であるという。本研究では、援助される犬の特性に年齢要因を設定し、この動物の赤ん坊性が人間の援助選択に及ぼす影響についても検討する。

以上本研究は探索的な調査となっており、動物を援助するに際しての心理的報酬、愛他性動機的側面とその構成要素に焦点を当てることが目的となっている。

方法

手続き

通常の講義時間を利用して行われ、質問紙を直接手渡して回答を依頼し、その講義時間内に回答を得た。

調査実施期間

2000 年 11 月～2000 年 12 月。

調査回答者

近畿圏2大学の学生204名（男性：82名、女性122名）、平均年齢20.2歳（SD=1.81, 18～29歳）。

調査紙の構成

質問紙の内容は、動物に対する援助の選択課題、ペットへの依存尺度、動物に対する愛着尺度、情動的共感性尺度、援助規範意識尺度、フェイスシートから構成されている。

動物に対する援助の選択課題：本課題で行われる選択は、被験者の判断の精査を促すため、Burnstein et al.(1994)を参考に、基本的には一対比較法による尺度構成となっている。回答者は設定された状況下にある2匹の犬を想定し、そのうちどちらか一方の犬を助ける、どちらの犬も助けたいので選択出来ない（結果2匹とも助けることが出来ない）、あるいはどちらの犬も助けたくないの計４つの選択肢のうち１つを回答した（Table1）。また、選択課題を行う前の教示文において2匹の犬のうち、どちらか一方しか助けられないことを明記した。

Table1 動物に対する援助の選択課題例

【例】	A）火元に近い奥の部屋にいる、生後 3ヶ月の犬 B）火元に近い奥の部屋にいる、生後 15年の犬 C）どちらも助けたくて、選ぶことができない D）どちらも助けたくない

援助状況の設定は、Burnstein et al.(1994)における life-or-death 状況と everyday 状況間の援助選択の違いを考慮し、リスクの高い援助状況とそうでない援助状況間の違いを検討するため、援助の選択によって援助者、援助対象の生命に影響の及ばない日常状況、および援助の選択が援助者、援助対象ともにその生死に影響を与える生死状況の2状況を設定した（Table2）。それぞれ、岸本（2000）において動物が援助対象であるという主旨を盛り込み設定された援助状況のうち、最も日常・生死状況を無理なく表現していると判断したものを使用した。

Table2 設定された援助状況

【日常状況】	ある昼下がり、あなたは家の犬の体を洗ってあげることにしました。最近ほとんど洗っていなかったので、ノミがついているのでしょうか？しきりに足で体を引っ掻いており、とてもかゆそうに見えます。しかし、あなたは午後に大事な待ち合わせの約束があり、それまでには家を出なければなりません。あなたの家には 2匹の犬がいるのですが、洗うことができるのは、1匹だけです。あなたは、どちらの犬を洗いますか？
【生死状況】	あなたの家が火事になりました。あなたの家は木でできていて、炎は瞬く間にあなたの家を覆いました。あなたはかろうじて逃げることができましたが、その時 2匹の犬が家に閉じこめられていることに気が付きました。あなたはこの 2匹の犬のうち、1匹だけを助ける時間と余力が残っています。助けられなかった残りの 1匹の犬はほとんど確実に死んでしまいます。あなたはどちらの犬を助けますか？

想定された犬の属性は、援助に伴う報酬・コスト要因と、犬の年齢要因の２つの特性で構成されている（Table3）。結果得られる犬のバリエーションは2×2＝4つ（「報酬コスト：あり vs なし」×「犬の年齢：生後5ヶ月 vs 生後15年」）である。この4つのバリエーションについて、考えられる2匹の犬の組み合わせは全部で6つであり、それぞれ Table1 に示した形で提示され、選択肢の回答が求められた。

Table3 想定された犬の属性

【報酬・コスト】　その犬を援助する際に伴う報酬・コストの有無を示す．状況別の設定は以下の通り．

	コストあり		コストなし
日常状況	洗うのにとても時間がかかりそうな	―	すぐに洗えそうな
生死状況	火元から遠く入り口に近い部屋にいる	―	火元に近い奥の部屋にいる

【犬の年齢】　幼犬（生後5ヶ月）か老犬（生後15年）か

ペットへの依存尺度：山田（2000）における、人とペット動物との心理的関係の分析の中で尺度化された項目のうち、第1因子として挙げられた“ペットへの依存”尺度から、特に因子負荷量の絶対値が高い順に７項目を使用した。形式は５段階リッカートスケールにより回答を求めた。

動物に対する愛着尺度：動物一般に対する愛着度を測定する尺度である。計6項目から成り、5段階リッカートスケールでの回答が求められた。岸本（2000）において、α係数は0.90 を得ており、高い内的一貫性が確認されている（Table4）。

Table4 動物に対する愛着尺度

1. 私は動物が大好きである。
2. 私は動物をかわいいと思う。
3. 私は動物と一緒にいると心がなごむ。
4. 私は動物のために世話をするのが大好きである。
5. 私は動物が危険な状況にいると、見ていられなくなる。
6. 私は動物が苦しんでいるのを見ると、かわいそうになる。

情動的共感性尺度：高木（1976）の作成した情動的共感性尺度(EES :Emotional Empathy Scale)は、“感情的暖かさ”、“感情的冷淡さ”、“感情的被影響性”の3つの下位尺度から成る。この尺度項目について岸本（2000）で得られた調査結果に基づき、“感情的暖かさ”因子が、さらに“感動しやすさ”と“同情”の2因子に分かれ、合計4因子構造であることが確認された。本研究では、ここで確認された因子構造及びそれを構成する質問項目を用いることとする（Table5）。

Table5 本調査で用いられた情動的共感性尺度項目

番号	質問項目	FACTOR1【冷淡さ】	FACTOR2【被影響性】	FACTOR3【感動】	FACTOR4【同情】	共通性
1.	私は友人が悩みごとを話し始めると、話をそらしたくなる。	69	-1	1	-9	0.49
2.	私は他人の涙を見ると、同情的になるよりも、いらだってくる。	63	-15	-22	3	0.47
3.	私はまわりの人が悩んでいても平気でいられる。	59	-6	-3	-18	0.38
4.	私は不幸な人が同情を求めるのを見ると、いやな気分になる。	52	-24	-12	4	0.39
5.	私は人がどうしてそんなに動揺することがあるのか理解できない。	48	-34	-19	-12	0.34
6.	私は友人が動揺していても、自分まで動揺してしまうことはない。	-11	68	5	11	0.48
7.	私は他人の感情に左右されずに決断することができる。	-19	62	-11	-1	0.42
8.	私は感情的にまわりの人からの影響を受けやすい。	-8	49	21	12	0.32
9.	歌を歌ったり、聞いたりすると、私は楽しくなる。	0	-3	69	-2	0.49
10.	私は映画を見る時、つい熱中してしまう。	-11	6	63	9	0.31
11.	私は愛の歌や詩に深く感動しやすい。	-21	12	50	9	0.44
12.	私は人が冷遇されているのを見ると、非常に腹が立つ。	-7	12	1	76	0.44
13.	私は大勢の中で一人ぼっちでいる人を見ると、かわいそうになる。	0	3	3	66	0.60
14.	私は身寄りのない老人を見ると、かわいそうになる。	-23	10	20	38	0.24
	固有値	1.88	1.34	1.33	1.27	5.82
	寄与率	13.45	9.57	9.50	9.07	41.59

※岸本（2000）の調査結果による．

援助規範意識尺度：箱井・高木（1987）において開発された援助規範意識尺度（Helping norm scale）より、第1尺度（返済規範）から3項目、第2尺度（自己犠牲規範）から2項目、第3尺度（交換規範）から2項目、第4尺度（弱者救済規範）から2項目、それぞれ特に因子負荷の高い項目を抜粋して使用した。形式は５段階リッカートスケールにより回答を求めた。

フェイスシート：年齢、性別、宗教の有無のほか、“現在ペットを飼っているか”・“過去にペットを飼ったことがあるか”といったペット飼育経験および、また“飼っている（飼ったことのある）ペットに犬が含まれているかどうか”について回答を求めた。

対人社会心理学研究, 2001 年, 第 1 号, 159-170.
Japanese Journal of Interpersonal and Social Psychology, 2001, No. 1, 159-170.

結果

犬の属性と援助状況

犬の属性として報酬コスト要因と犬の年齢要因を取りあげた。回答者がある犬を援助対象として選択した場合、その犬の特徴とした報酬コストと犬の年齢、それぞれに1点を加え、日常状況、生死状況、それぞれ6題の回答を同要因同水準別に加算した（得点範囲は ０～4、数値が高いほど当該の属性を持つ犬が援助対象として多く選択されたことを示す）。この合計得点は従属変数として扱われ、報酬コスト要因、犬の年齢要因、援助状況は被験者内要因独立変数として扱われた。

援助状況（2水準）×報酬コスト（2水準）×犬の年齢（2水準）について繰り返しのある3要因分散分析を行った結果、報酬コスト（$F(1,203)=182.28$, $p<.001$）及び犬の年齢（$F(1,203)=49.18$, $p<.001$）の主効果が確認され、コストありよりもコストなしの方が、生後１５年の犬よりも生後3ヶ月の犬の方が援助対象としてより多く選択されることが示された。また、援助状況×報酬コスト（$F(1,203)=19.26$, $p<.001$）及び援助状況×犬の年齢（$F(1,203)=14.39$, $p<.001$）の交互作用についても確認され、生死状況では、日常状況に比べコストありなしによる援助選択の格差が縮まり、生後１５年の犬よりも生後３ヶ月の犬の方がより助けられやすい（Figure1,2）。

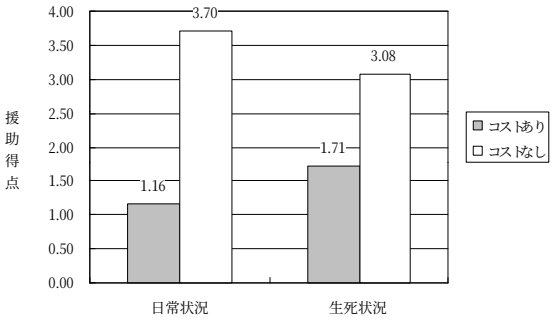

Figure1 援助状況×報酬コスト

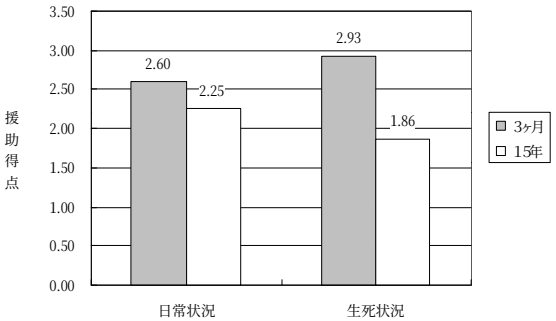

Figure2 援助状況×犬の年齢

非援助選択の理由と援助状況

本研究における動物に対する援助の選択課題では、想定された2匹の犬をどちらも助けない選択肢が2つ用意されている。1つはどちらも助けたいために選ぶことが出来ないという選択肢（Table1 中 C 参照）であり、もう1つはどちらも助けたくないという選択肢（Table1 中 D 参照）である。日常状況、生死状況、それぞれ6題の選択肢における選択回数を加算した（得点は ０～6、数値が高いほど当該選択肢の理由で、どちらか一方の犬に対する援助がなされなかったことを示す）。この合計得点は従属変数であり、非援助選択の理由は被験者内要因独立変数である。

援助状況×非援助選択理由について繰り返しのある2要因分散分析を行った結果、非援助選択理由の主効果（$F(1,203)=20.62$, $p<.001$）、及び援助状況×非援助選択理由（$F(1,203)=18.39$, $p<.001$）の交互作用が確認された。ここでは、生死状況においてどちらも助けたいために選択できないという回答が多いことが示されている（Figure3）。

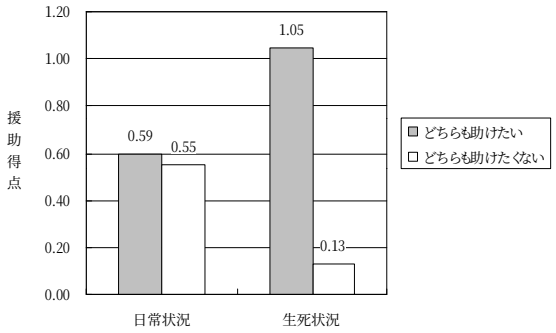

Figure3 援助状況×非援助選択の理由

ペット依存度・動物に対する愛着度と援助傾向の分析

ペット依存度および動物に対する愛着度について、高中低3群を設けた。このいずれか一方を独立変数とし、犬の年齢、報酬コスト、非援助選択の理由をいずれか1つ組み合わせる、繰り返しのある2要因分散分析を援助状況別に行った。日常状況における非援助選択理由×ペット依存度の交互作用（$F(1,202)=5.89, p<.05$）のみ有意であった。日常状況ではペット依存度の高い人はどちらも助けたいと感じる一方で、逆にペット依存度の低い人はどちらも助けたくないと感じる傾向にある。なお、この傾向は生死状況ではみられなかった（Figure4）。

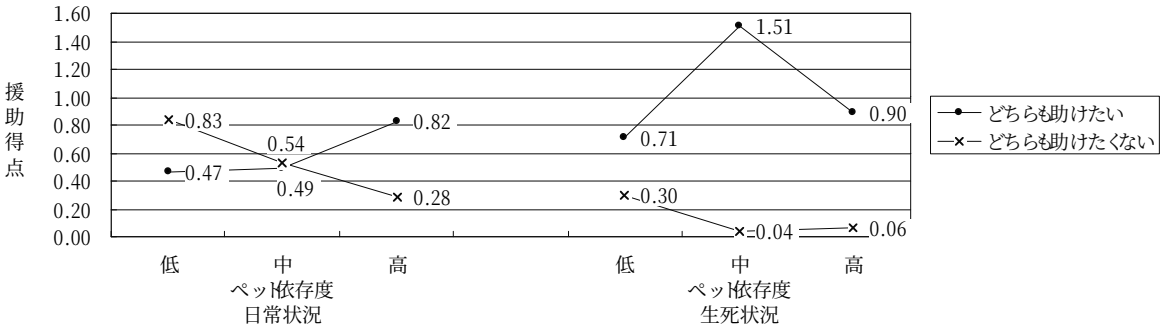

Figure4 非援助選択の理由×ペット依存度 [日常状況]

ペット飼育経験と援助傾向の分析

回答者のペット飼育経験を独立変数とした1要因分散分析をペット依存度、動物に対する愛着度、情動的共感性の下位尺度それぞれに対して行った。ペット依存度（$F(2,200)=3.13, p<.05$）、動物に対する愛着度（$F(2,201)=22.13, p<.001$）においてのみ主効果が認められており、ペット飼育経験のある人ほど、あるいは現在ペットを飼っている人ほど、ペット依存、動物に対する愛着の高いことが示唆された（Table6）。

Table6 ペット飼育経験別にみたペット依存度と動物に対する愛着度の平均値

	ペット依存度		動物に対する愛着度	
現在飼っている	2.92	A	3.90	A
過去飼ったことある	2.53	B	3.45	B
飼ったことがない	2.74		3.04	C

＊平均値右横の英字が異なる組み合わせで、TUKEYの下位検定の結果が有意（$p<.05$）

本研究で得られた回答者のペット飼育経験を独立変数とし、これに犬の年齢、報酬コスト、非援助選択の理由のいずれかを加える、繰り返しのある2要因分散分析を援助状況別に行った。日常状況、生死状況ともに犬の年齢×ペット飼育経験の有意な交互作用及びその傾向がみられた（日常：$F(1,202)=4.82, p<.05$、生死：$F(1,202)=3.06, p<.10$）。ここでは日常・生死状況ともにペット飼育経験がある人ほど、犬の年齢によって援助選択に差がつかないことが示されている（Figure5）。

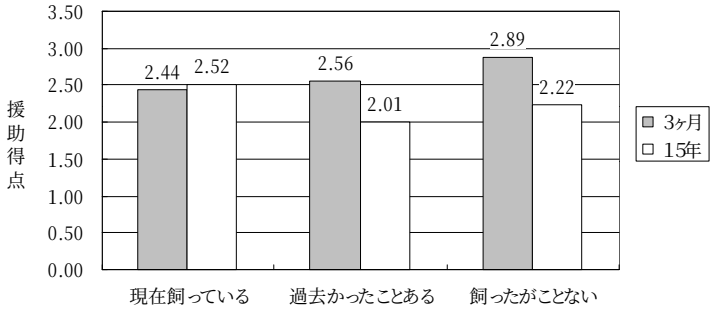

Figure5 犬の年齢×ペット飼育経験 [日常状況]

また、生死状況において非援助選択理由×ペット飼育経験の交互作用（$F(1,202)=$

4.67, p<.05）が認められた。ここでは援助状況によって非援助選択の理由が大きく変わり、生死状況ではペット飼育経験がある人ほど、どちらも助けたいと感じている傾向がみられた（Figure6）。

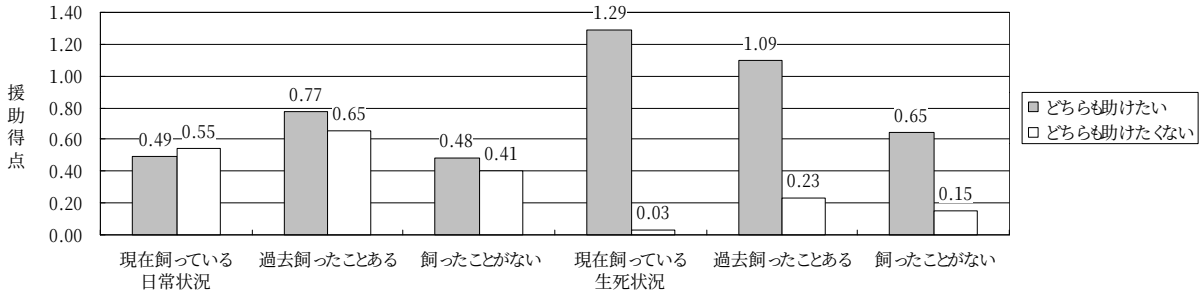

Figure6 非援助選択の理由×ペット飼育経験 [生死状況]

さらに、飼っている（飼っていた）ペットの種類についても回答を求めているが、これを独立変数として同様の分析を行った結果、報酬コスト×過去に飼っていたペットの種類の交互作用（日常：*F(1,72)=5.09, p<.05*、生死：*F(1,72)=3.47, p<.10*）が認められている。ここでは過去に飼ったペットに犬が含まれていると回答した人は、そうでない人に比べ、報酬コストによって援助選択に差をつけない傾向にある（Figure7）。なお、この過去に飼ったペットの種類（犬が含まれている／含まれていない）を独立変数とした t 検定をペット依存度、動物に対する愛着度、情動的共感性の下位尺度それぞれに対して行ったが有意な差は全くみられなかった。

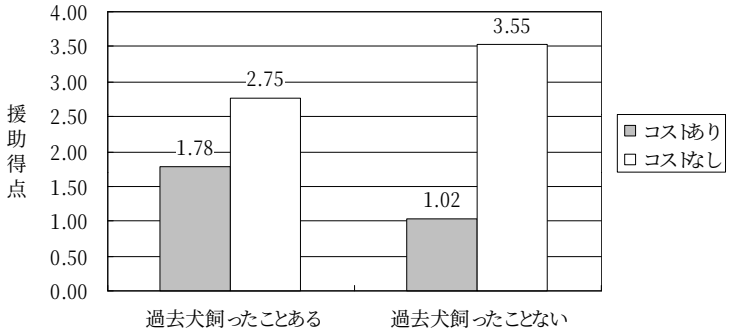

Figure7 報酬コスト×過去飼っていたペットの種類 [日常状況]

情動的共感性と援助傾向の分析

本研究で得られた情動的共感性得点とペット依存尺度、及び動物に対する愛着度との相関係数は Tabel7 の通りである。

Table7 情動的共感性とペット依存尺度及び動物に対する愛着尺度の相関係数

	情動的共感性			
	冷淡さ	感動	被影響性	同情
ペット依存度	-0.16 *	0.27 **	0.15 *	0.28 **
動物愛着度	-0.18 **	0.24 **	—	0.19 **

* *p < .01* ** *p < .001*

情動的共感性尺度を構成する４つの下位尺度それぞれについて、高中低３群を設けた。これを独立変数として、いずれか1つを報酬コスト×犬の年齢の独立変数に加える、繰り返しのある3要因分散分析を、援助状況別に行った。生死状況における報酬コスト×共感性[同情]因子の交互作用（*F(1,202)=7.14, p<.01*）のみ有意であった。また上記分散分析の独立変数に援助状況を加えた繰り返しのある4要因分散分析を行った結果、援助状況×報酬コスト×共感性[同情]因子の交互作用（*F(1,202)=4.73, p<.05*）が認められた。ここでは同情得点の高い人は、生死状況においてコストありなしによる援助選択の差が小さい傾向がみられる（Figure8）。

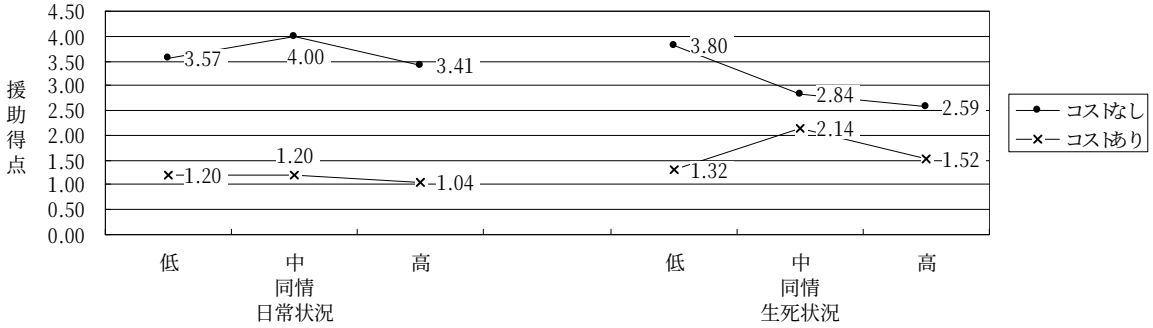

Figure8 報酬コスト×共感性 [同情]因子

また、非援助選択の理由についても同様に、情動的共感性尺度の4つの下位尺度いずれか1つを独立変数として組み合わせる、繰り返しのある2要因分散分析を援助状況別に行った。生死状況において非援助選択理由×共感性[同情]因子の交互作用（$F(1,202)=6.85,\ p<.01$）のみ認められた。ここでは同情得点の高い人は、生死状況においてどちらも助けたいと強く感じており、そのためどちらか一方の犬を選択できない傾向のあることが示された（Figure9）。

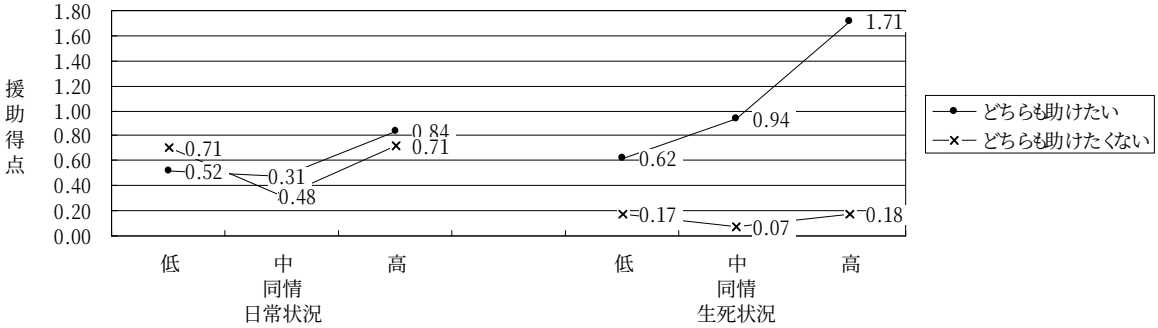

Figure9 非援助選択の理由×共感性 [同情]因子

考察

われわれが動物と関わる際、どのような動因が働いていると考えられるのか。ここで焦点を当てた問題の一つは、動物を援助するに際しての心理的報酬の検討である。

本研究では、設定された2つの援助状況それぞれにおいて明かな表面的物質的コストが設定された。コスト高低間の援助選択数の差の分析から、コスト要因は援助選択に大きな影響を及ぼしていることが分かる。コストがある場合、コストなしの場合に比べて援助選択は減少する傾向にあり、これは特に日常状況において顕著である。しかしこのコスト要因と援助状況間で交互作用が得られていることから考えると、相対的に生死状況ではコストあり・なしの差が小さくなるといえる。また本研究では、質問紙の設計上犬の年齢別に援助対象を選択するとコスト要因間の差は縮まるようになっている。生死状況では日常状況に比べ、生後3ヶ月の犬がより多く援助対象として選択されていることから、生死状況ではコストの大きな場合であったとしても生後3ヶ月の犬を助ける選択が多くなされたことが分かる。生死状況におけるコストは援助者自身の生命の危機であり、日常状況のコストに比べるとコストのより大きいものであると考えられるが、それにも関わらず、生死状況においてコスト要因の格差が縮んでいることは興味深い。さらに援助選択を行わない理由についての回答結果からは、日常状況と違い、生死状況ではどちらも助けたいという葛藤を感じていることが示された。ここでも、大きなコスト要因という判断材

料があるにも関わらず、それが生死状況で援助選択に影響を及ぼしにくくなることが示されている。Batson の一連の研究（Batson et al., 1981; 1983; Toi & Batson, 1982）は援助状況から逃げやすい条件を設定し、それでも援助行動が減少しないことから愛他性動機の傍証を得ているが、本研究でも同様に、コストの増大にも関わらず積極的な援助選択の減少がみられていないことから、そこには表面的なコスト以外の交換過程、つまり援助によって得られるある心理的報酬が存在するか、あるいはBatson のいうように援助対象の福祉向上だけを志向した“本当の”愛他性動機があることを示唆するものと思われる。特に以上のことは援助対象が動物である場合においても示されたことを強調しておきたい。

援助状況別に援助された犬の年齢をみると、生死状況では日常状況にくらべて生後3ヶ月の犬が援助対象として選ばれている。生死状況のコストを考えると、ここでは犬の赤ん坊性に基づく愛他性動機の存在を示唆するものと考えられる。しかし本研究では、援助傾向に大きな影響を与える要因としてペット飼育経験を設定したが、このペット飼育経験別に犬の年齢をみた場合、現在ペットを飼っている人は日常・生死状況ともに犬の年齢に差はなかった。ただし非援助選択の理由として、どちらも助けたいとする回答もまたコストあり・なしの判断に影響を受けていないという点で愛他性動機を示す大きな指標であると考えられる。この指標に関してみた場合、現在ペットを飼っている人はどちらも助けたいという葛藤をより強く感じていた。特にこのどちらも助けたいという葛藤がペット飼育経験によって異なる傾向は、生死状況において顕著であり、日常状況で同様の傾向は得られていない。生死状況は援助者にとって大きなコストあり・なしが設定されているが、それにも関わらず以上のような葛藤が生死状況で生じ、それがペット飼育経験によって大きく異なることは、その葛藤を生み出すと考えられる心理的報酬ないし心理的損失の程度、あるいは愛他性動機を規定する要因の1つとして、ペット飼育経験、ひいては援助対象との関係性が大きな役割を果たしている可能性が示唆されるものと思われる。特に本研究での援助対象は犬であるが、過去に犬を飼ったことがあるかどうかによっても部分的に援助選択に違いがみられている。なお、ペット飼育経験によってペット依存度、動物に対する愛着度に大きな違いがみられているが、ペット依存度、動物に対する愛着度高中低別にみた場合、援助選択への影響はほとんどなく、特に生死状況では全くみられなかった。以上のことは、ペット・動物への嗜好性以上にその飼育経験が援助選択の違いに大きな役割を果たしていることを示しており、援助対象との関係性が重要であることを改めて示唆するものと思われる。

最後に、援助行動における愛他性動機を吟味する上で重要視されている内的変数である共感性について、本研究では情動的共感性尺度の下位尺度を構成したものを用いたが、援助傾向に影響を与えていたものは同情因子のみであった。生死状況において同情因子得点が高い人ほどコスト高・低によって援助選択に差をつけず、どちらも助けたいという葛藤を感じていることが示されている。この共感性という問題について Davis（1994）によれば、「この分野で努力してきた人々の間で意見の不一致がみられたし、それが続いてもきた」。その原因として、1つには中心的な用語が意味論的な問題を抱えていること、2点目として共感を考える際に過程と結果を区別せず、認知的側面、情動的側面を長きにわたって混同してきたことを挙げている。中心的な用語とは同情と共感であり、意味論的な問題の1つは、同情という言葉が一般的にあわれみの感情という独特のニュアンスを持っていることである。本研究では、情動的共感性尺度（EES）を再度因子分析し、得られた因子のうち1つを同情と命名した。同情因子を構成する質問項目の詳細は Table5 の通りであるが、先の意味論的な問題を適切に扱っているものと思われる。またこのあわれみの感情は、共感の情動的側面を示すものであり、共感する対象と異なる感情を生起していることから応答的な結果であるといえる。Davis（1994）によれば、この応答的な結果には「相手の手掛かりを認知したり解釈したりする高次の過程が必要」とされ、結果生じる感

情は「他人中心的なものとなりやすい」。共感に関連した構成概念と援助行動との間に確実なプラスの関係があることは多くの研究から結論づけられているが（Underwood & Moore, 1982; Eisenberg & Miller, 1987）、本研究において特に同情因子についてのみ援助傾向に影響がみられたことは、動物を援助する際、この情動的で応答的なあわれみの感情が援助行動の生起に大きく関わっている可能性を示唆するものと思われる。

以上本研究では動物に対する援助における、表面的物質的コストの大きさに左右されない心理的報酬の存在、動物所有経験あるいは動物との関係性の重要性、情動的・応答的なあわれみの共感特性である同情因子の影響について論じた。中でも被験者の特性として設定されたペット飼育経験と共感性はどちらも、現在ペットを飼っている人ほど、また、共感性の高い人ほど、コスト・犬の年齢で援助選択に差をつけず、どちらの犬も助けたいという葛藤を感じていた点でより愛他的であることが示唆された。一方、この葛藤が特に顕著であった生死条件における両要因と非援助選択理由間の交互作用の大きさを比較すると、どちらも助けたいという葛藤に対する影響力は共感性の方が若干大きいことを示しており、今後援助行動の愛他性を検討する上で共感性に焦点を当てることの妥当性を示唆するものである。今後動物に対する援助行動という文脈の中でもさらに精緻化されることが期待される。

引用文献

Baron, R. A. (1971) Behavioral effects of interpersonal attraction: Compliance with requests from liked and disliked others. *Psychonomic Science*, **25**, 325-326.

Batson, C. D., Duncan, B. D., Ackerman, P., Buckley, T., & Brich, K. (1981) Is empathic emotion a source of altruistic motivation? *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 290-302.

Batson, C. D., O'Quin, K., Fultz, J., Vanderplas, M., & Isen, A. M. (1983) Influence of self-reported distress and empathy on egoistic versus altruistic motivation to help. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 706-718.

Batson, C. D. (1987) Prosocial motivation: Is it ever truly altruistic? In L. Berkowitz （Ed.）, *Advances in experimental social psychology*: Vol. 20 (pp. 65-122). New York: Academic Press.

Batson, C. D. (1991) *The altruism question: Toward a social-psychological answer*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Baun, M. M., Bergstrom, N., Langston, N. F., & Thoma, L. (1984) Physiological effects of Human: Companion animal bonding. *Nursing Research*, **33**, 126-129.

Burnstein, E., Crandall, C., & Kitayama, S. (1994) Some neo-Darwinian decision rules for altruism: Weighing cues for inclusive fitness as a function of the biological importance of the decision. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 773-789.

Cialdini, R. B., Baumann, D. J., & Kenrick, D. T. (1981) Insights from sadness: Athree-step model of the development of altruism as hedonism. *Developmental Review*, **1**, 207-223.

Corson, S. A., Corson, W. L., Gwynne, P. H., & Arnold, E. L. (1977) Pet dogs as nonverbal communication link in hospital psychiatry. *Comprehensive Psychiatry*, **18**, 61-72.

Davis, M. H. (1994) *Empathy: A Social Psychologycal Approach*. Westview Press. (菊池章夫 (訳) 1999 共感の社会心理学 川島書店)

Eisenberg, N. & Miller, P. A. (1987) Empathy and prosocial behavior. *Psychological Bulletin*, **101**, 91-119.

Folse, E. B., Minder, C. C., Aycock, M. J., & Santana, R. T. (1994) Animal-assisted therapy and depression in adult college students. *Anthrozoos*, **7**, 188-194.

Katcher, A. H. (1981) Interactions between people and their pets: Form and function. In B. Fogle (Ed.), *Interrelations between People and Pets*. Springfield, IL.: Charles. C. Thomas, Publisher.

岸本渉 (2000) 「あなたはなぜ動物を助けるのですか？」： 社会的交換理論と共感性からみる援助行動 日本グループ・ダイナミック学会第４８回大会発表論文集、 126-127.

Levinson, B. M. (1969) *Pet-oriented child psychotherapy*. Springfield, IL.: Charles. C. Thomas, Publisher.

Levinson, B. M. (1972) *Pets and Human Development*. Springfield, IL.: Charles. C. Thomas, Publisher.

Levinson, B. M. (1984) Human: Companion animal therapy. *Journal of Contemporary Psychotherapy*, **14**, 131-144.

Lorenz, K. (1965) *Uber Tierisches und Menschliches Verhalten*. (日高敏隆･丘直通 (訳) 1989 動物行動学 思索社)

Mallon, G. P. (1994) Some of our best therapists are dogs. *Child and Youth Care Forum*, **23**, 89-101.

McCulloch, M. J. (1981) The pet as prosthesis: Defining criteria for the adjunctive use of companion animals in the treatment of the medically ill, depressed outpatients. In B. Fogle (Ed.), *Interrelations between People and Pets*. Springfield, IL.: Charles. C. Thomas, Publisher.

Netting, F. E., Wilson, C. C., & New, J.C. (1987) The human-animal bond: Implications for practice. *Social Work*, **32**, 60-64.

Regan, D. (1971) Effect of a favor and liking on compliance. *Journal of Experimental Social Psychology*, **7**, 627-639.

齊藤勇 (1985) 対人感情と情緒の人間関係的アプローチ 心理学研究, 56, 222-228.

高木秀明 (1976) 情動的共感性と援助行動の関係に関する研究 日本教育心理学会第 18 回総会発表論文集, 448-449.

竹村和久 (1988) 対人感情が援助行動意図に及ぼす効果 日本社会心理学会第 29 回大会発表論文集, 44-45.

Staub, E. (1978) *Positive social behavior and morality: Social and personal influences*: Vol. 1. New York: Academic Press.

Toi, M. & Batson, C. D. (1982) More evidence that empathy is a source of altruistic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 281-292.

Trivers, R. (1971) The evolution of reciprocal altruism. *The Quarterly Review of Biology*, **46**, 35-57.

Trivers, R. (1985) *Social evolution*. Menlo Park, CA: Benjamin/Cummings Publishing Co. (中嶋康裕･福井康雄･原田泰志 (訳) 1991 生物の社会進化 産業図書)

Underwood, B. & Moore, B. (1982) Perspective-taking and altruism. *Psychological Bulletin*, **91**, 143-173.

Psychological reward and altruistic motivation on helping behavior to animals

Wataru KISHIMOTO（*Graduate School of Human Sciences, Osaka University* ）

The purpose of this study was to investigate which the psychological reward and altruistic motivation have an influence on helping behavior to animals. 204 undergraduates(82 males and 122 females) as subjects responded to a questionnaire inquiring into choice which dogs in need he or she helped. Dog's age, situation in need, physical cost, subjects' experience of having a pet and subjects' empathy was manipulated as a factor to have an influence on helping behavior to animals, and the factor's effect on the choice was analyzed. The main findings were as follow: 1)In a situation that the choice endangered not only dog's life but also subject's one, compared with the opposite situation, physical cost didn't affect choice significantly, and the subjects felt the conflict that he or she wanted to help both dogs; and 2)the subjects who had a pet at the present or had a strong empathy were more likely to feel the conflict. The results were that subjects' experience of having a pet and empathy play an important role in an altruism when the subjects helped animal in need.

Key words：helping behavior, social exchange, empathy, altruism, animal, pet